

龍南

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 9
ページ	3 8 - 5 6
発行年	1913-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/6441

龍南

宗教を論ず

宗教など、あんな死にかつてゐる奴を相手に、躍氣となるなどは、却つて此方の沽券に係ると言ふ男もあるが、余は思ふに、此の問題は實に人類の有せる一大問題であつて、決して輕々に看過すべきものではなからう。現に數千年に亘つて幾時代の大學者が宗教に關して論じて居る、併し乍ら今日迄未だ満足なる解決が得られない。況んや自然科學勃興以來は遂に科學と宗教との對峙となり、幾多の學者は宗門の壓迫を受けて、その生命をも賭した。現在に於ても、確がババリヤであつたと思ふが、其處の或る僧侶が、ヘッケルの議論を聞いて非常に驚き、直ちに走つて主侯に面謁し、ヘッケルはあんなに悪い事を公言して居るが、何故貴侯は彼を差止めになりませぬか、と言つたとかで、一の笑話が出来た程である。國教主義を固守して、宗教的言議に一定の抑壓を

與へつゝある歐洲に於てさへ、かくの如く宗教の議論は盛んであるのに、信教の自由ある我が日本に於て、眞面目に此の問題を考ふる人の少ないのは甚しい遺憾である。こは早晚人類自身が解決せざる可らざる必然の遺産である。吾人は大に此に關して考慮を費すの必要があると思ふ。故に自己の非才をも顧みず、此に枯筆を呵して、賢明なる諸兄の前に敢て短見を吐露せんと欲する次第である。

先づ問はんと欲する所は、宗教家は今日果して、自己の所有せる宗教的根柢を提げて、宇宙の問題を解決せんとするの勇氣あるか否か、である。余の見所によれば悲しい哉彼等には此の勇氣がない。昔は而し隨分猪馬の輩が居た。無謀ながら彼等は、神の實在を公言して、自然科學を卑下するの勇氣があつた。さう昔でなくとも、十九世紀に於ても此んな男は大分澤山居た。キヤークゴールド(丁抹)の如きはその一人である。彼は一面に於て舊式基督教を攻撃したが、他面大に信仰生活を力説した。而し悲しいかな彼は自然科學が今日發見した多くの新知識を知らなかつた。彼にして若し近代科學が有する進化

論、無機有機兩界の連絡、精神病學等に關し些少なりとも知る所があつたならば、彼の如き愚論は吐かなかつたであらうと思はれる。

今日に於ては、假令宗教家と雖、多少科學的智識を有せる人ならば、進んで宗教の眞理よりして、宇宙の諸現象を解明するの勇氣がない。何となれば宗教より出發するに於ては、必然の歸結として、神の實在、神の攝理、世界の創造を叫ばざるを得ないのであるが、然るに、今日此の如き事を公然主張する時は、必ず有識者の物笑の種となるからである。

吾人の眼前に横る無數の自然現象に關しては、今日宗教は何等興る所がない。否與り得ないのである。宗教の根柢は一小主觀である、惡く言へば迷信である。古代迷信に立脚して開展し來りたる宗教が如何んぞ宇宙現象を説明し得るものぞ。今日の宗教を、往時の勇氣に富みたりし宗教に比すれば、確かに宗教の下落を叫ばざるを得ない。寧ろ當然の下落である。然るに彼等はこの下落と共に、科學に對しても同一の連累を加へて、以て科學は到底自然現象全部を説明し得るものにあらざと揚言しつゝあるが、吾

人は今更その卑怯なる態度を陋とする。この科學の誹謗が果して幾分か、今日宗教の下落を緩和するの功あるか否かは、智者を待たずして明かであると思ふ。

然るに、今日一般の定論は宗教的眞理と科學的眞理とは、その方向を異にせるものであつて、兩者は全然異なる使命の下に生れ出でたるものであるといふことに一致してゐる。即ち科學及宗教は共に個々の範疇を有し各自特別の任務を有せるものである。故に科學によつて宗教的解決を得んとする事が誤謬であると等しく、科學のうちに、宗教的眞理を要求することも亦誤れるものである。この見地よりすれば嘗て自然現象の總てを、宗教的に説明せんと試みたるは、これ古代人の迷想であつたといふ結論に到達するのであるが、今日尙多くの人々が、此等古代人と同一の經路によりて、等しき謬想に陥りつゝあるを見て、吾人は之を遺憾とするものである。然し乍ら吾人は苟も普通教育を終へたる有常識の人士中には、此の如き迷信を懷きたる者は、今日一人も之なきことを信せんと欲す。

第廿世紀に於ては、宗教は全く客觀的宇宙説明者たるの地位を退きて、單に人類の認識に於て、彼等自身の現象を、主觀的に倫理的に解決する最も簡單なる方法と化けたのである。由來一般に人類が、自身の現象を倫理的に有意義に解決して、一貫したる法則を得んとしたるは希臘以來數千年間、人類が全精力を用ゐて、或は哲學として或は宗教として、或は自然科學として、努力し來りたる最大の試みである。此の試みの舞臺に於て、主役として感動したのは勿論宗教であるが、此の情勢は、自然科學が人類を靈長の地位より一蹴して、哺乳動物の一項中に墜落せしめたる今日に於ても、尙依然として人類の大部分中に強き潛勢力として存在してゐるのである。この情勢によりてのみ、宗教は彼が嘗て有したる一大根抵即ち自然現象の説明者たる大地位を哀れ自然科學に委し去りながらも、尙人事行動の倫理的解決者として存在し得るのである。

吾人より見れば、人事行動を以て、常に必然的に何等かの倫理的意義を有せるものとなすは、これ遺憾にも人類がその愚昧なる祖先より遺傳したる一大

惡質である。従つてその結果たる今日の宗教及道德には何等一貫したる根抵内容を吾人は發見し得ない抽象的な迷論と、空想的なる誇張を他にしては、彼等は全然零である。由來、人類を以て他の動物に超然たらしめ、その精神現象を以て彼に特殊なるものとなし、此所に何等かの意義を與へて、彼の虛榮心を満足せしめ來りたるは、これ起原深き人類中心主義の根柢なき所産と言はねばならぬ。精神作用は決して人類に特有なるものにあらず。人類中下層なるものゝ精神作用は之を類人猿に比して、殆んど甲乙なきものである。故に人類を目して靈的となし、彼等の行動を以て常に有意義のものとなすは、寧ろ謬りたる思想である。

然し乍ら、この思想は人類が數千年間祖先より遺傳し來りたるものであつて、今日一朝一夕にして、之を人類の腦中より奪ひ去ることは甚だ困難と云はねばならぬ。今日宗教が尙存在し得る所以は、人類が未だ人類中心主義の所産たる倫理的人生觀の桎梏より脱し得ざるがためである。新しき宗教と呼び眞宗教と言ふも、畢竟その立脚地はこの倫理的人生觀

に外ならぬ。宗教は未開時代に於て、人類行動の倫理的解決の手段として、空想の上に築き立てられたるものであつて、今日の宗教も、所詮は之より發展し來りたるに過ぎぬ。

然るに自然科學の見地よりすれば、人類も寧ろ自然體の一であり、彼の精神作用も一の自然現象に止り、何等他に超絶して彼に特殊なる意義あるを認めぬ。而して彼の主張は經驗と事實の上に立脚せるものである。何人と雖、その一々を否認し、その非理を叫び得ざるものである。敢て之を當然なすものは當然精神異常者として彼の認識力を疑はるゝに至る故に如何に自然科學を罵る者も、單に總體論に止りて、彼が有する一々の眞理に對しては何等の反證をも示し得ないのである。されば自然科學を厭へる一部の宗教家の如き、これ科學を罵り誹謗するものであつて、決して科學の根柢を搖し得るものにあらず。自家の顛覆を懼るゝ宗教家は如何に科學者を攻撃するとも、單に犬の遠吠であつて、實に一指をも染むる能はず。故に科學者は之等に對しては、悠容迫らず、唯彼等の迷夢と妄想とを訓ふるに努力するのみ

である。

現代の思潮に於て、人類間に相衝突する二種の人生觀あることは、以上の論に見て明白なることである。一は宗教的人生觀であり、一は科學的人生觀である。即ち之を極端に走らしむれば、唯心論理想主義及び唯物質主義となるのであるが、今日にありては、兩者は寧ろ甚だ相接近せんとするの傾向がある。調和的一元論は此に發生し來るものであるが、主觀的、空想的なる宗教と、客觀的、經驗的なる自然科學とは到底相容るゝ能はざるものである。生物學の泰斗たる英國のウオレスは一面に於て科學的事實の上に立脚し乍ら、他面大に神の攝理と勢力とを力説しつゝある。彼は兩者の調和に苦心すると共に、ヘッケルの極端論を攻撃して寧ろ宗教的傾向に走りつゝあるのであるが、吾人は彼の苦心を諒としつゝ、亦彼が曝露したる著作中の矛盾を見て、大に彼の爲に惜むものである。空想と事實とは本來決して混同すべからず。此の自明の理に背きて、兩者の調和を計らんとするはこれ無効の努力である。即ちその結果や知るべきのみ。

迷信と事實、空想と經驗、獨斷と眞理、見來れば兩人生觀の勝敗の數や既に明らからである。唯だ從來の習慣上、宗教家が、權勢を好む帝國主義者や頑迷なる道德論者と相結托して、よく未開人の心情に投じ、彼が弱點に乗するの巧なるが故に、彼は今日漸く科學と相對峙し得るのみ。人類が有する古來の歴史に徴するに、自然科學が生物學等の見地に立ちて、舊來の人生觀上の大僻見を破りて、人類の記錄に一の警告を與へたるは全く近來數十年の事に屬する。即ち此の舊人生觀に依りて、宗教が年來の勢力を維持せんと企圖しつつあるは、勿論無理ならぬ所であるが、然し乍ら、最近自然科學の勢力は亦決して侮るべからず。獨乙の如きは、彼が國教主義の維持上、隨分苦痛を嘗めつゝある由である。學校内に於ても、宗教訓育と科學教育との間に生起する矛盾の調和に關しては、獨乙政府は甚しき苦心を爲しつつあるけれども、此の場合姑息なる手段は、今後の科學の實勢力に關しては何等の効果をも與ふるものにあらざると信す。

一部の人士によりて頻りに驢迎せらるゝオイケン

の倫理的哲學の如きは、畢竟此の滔々たる科學の勢力に對する一の反動に外ならず。彼等の聲や徒らに大なれども、その内容に至りては、實に空漠なるを免れず。その思索的なる、その主觀的なる、その內省的なる、その抽象的なる、寧ろ吾人をして失望せしむること大にして、些も吾人の理性と客觀的傾向に對して其鳴を與へない。吾人は未だ一介の學生である、敢て現代大家の學識を是非するを好まないけれども、吾人が彼に依りて、遂に徹底したる何物をも得る能はざりしは、此れ事實である。オイケンが今日、單に前教授の主張を襲ぎて、世の反動的風潮に迎合しつつあるといふ酷評を受くるのも、却つて幾分の眞理があると思ふ。

以上論じたる所を總括して述べるが、自然科學の勃興によりて、有神的宇宙觀の消滅すると共に、宗教が自然現象解決の舞臺より退去したるは言を要せざる所である。唯々彼は人類が古來有したる倫理的人生觀の情勢に乗じて、今日、人事現象の解決者として在來の地位を保持せるものである。而し乍ら、後者の範圍に於ても宗教は甚しく自然科學の壓迫を

受けつゝあるが、たゞ未だ科學の進歩十分ならずして、精神作用等に關し、なほ十分解明し能はざるが故に、宗教は最後の自滅より免れ得るものである。

此に一言挿むべきは、科學は徒らに宗教を破壊し、彼を討滅するを以て、其の職分とせざることである。たゞ彼は眞理の根柢に立ちて、自然現象の何たるかを闡明するに止る。其の結果、宗教が自滅すると否とは、勿論彼の關知する所にあらず、彼は只眞理に忠實なるのみ。主觀的演繹的なる宗教と、客觀的歸納的なる科學とが、最後の眞理に到達せんとして採る所の方法又は手段は、各々相異なる所があらう。此の點に關しては即ち兩者は決して相混合すべきものではなからう。然るに或る同一の對象に關して、兩者の見る所、互に衝突するが如き場合に於ては、人類は忽ち大なる矛盾に苦まざるを得ない。勿論此の時採るべき傾向は、各人の性格によりて、夫々異なる所があらうが、一般知識の普及を豫想する時は、其の何れが勝利を得るかは説かずして明らからう。今日の一般的傾向は充分この結論に裏書して餘あるであらうと思ふ。彼の近時に於ける宗教歐歌熱の流

行は、偶々一時の反動に過ぎざるものであつて世界の大勢には何等の關する所なしと言ふも敢て過言ではない。

寒雨を胞んだ灰色の雲が去る毎に、地平に近かつた太陽の軌道が自ら高り來つて、水氣の脱けた木の枝にも、香を包んだ溫汗が繞り始めた。思索の時期は去つて、憧憬の春は迫つた。龍南の諸士よ幸に健在なれ。

(北村眞躬)

科學の哀調

科學をいくら研究しても人生問題の解決は不可能である。僕は絶叫したい、但僕等は幾分なりとも科學の代表者として將來世に立つべき責任があるので科學に對して多大の同情を有たねばならぬ、が畢竟するに科學は人生を解決する性質のものではないと信する。

最初に僕は、天に在す私共の御父さんや全知全能の神様などが、小供騙の言葉だと思つた、又或書物に鶏の發生の由來を學者が答へ得なかつたのを平生神様の御話を聞いて居た少女が、一番始の鶏は神様

が御造りになつた、と答へて學者を閉口させたと言ふ話がある、僕は此話を讀んだ時に基督教はダーヴ

ンの進化論を知らない、と笑つた、神様が全知全能であるならば元始に鶏を作つて卵を生ませて再鶏にする様な面倒な事を繰返さないで一度に鶏を造つたら如何だらう、又神様は目には見わないでも、「神その像の如くに人を創造り給へり」とあるから神様は人間の様に頭胴手足、目鼻耳口がなくてはならぬと思はれる。ゆかしき草花は創造主の御恵のかをりを野山に充たし、小鳥は御恵の節を朝より歌うて、神様の御榮を讚美すると云ふことである、神様はまた善人も惡人も御造りになり、人間に病氣其他の苦難を負はせらるさうで、神様の御攝理は知るべからずで、苦しいときに神様の御心だと諦め、一步進んで有難がり、感謝すると云ふ妙な狂人も世間にはある。矢張、聖書は嘶であつたのだ、小供が泣かない様に突飛な御話を集めてある、とても問題にはならぬ、大騒する必要はない、冷靜に考ふれば基督の十字架が先登第一に滑稽である、使徒等の苦心も可笑しい、ローマに於ける大迫害も物語である十字軍!!この位

の迷信中毒は二つとない、亞米利加征服のときに軍隊の手先に僧侶が行つた。

斯くて起つて來るべき當然の問題は宗教信仰の價値である、世人を救ふと唱道しては居るが迷信に中毒して居ない普通の精神状態にあるものは神様が彼の多くの殉教者を救はれたとは思はれない、十字架にかゝり乍ら吾は世に勝てりと言つた所で世に勝つた様にも受取れぬ、肉体は死すとも靈魂は救はるべしと云ふ、然らば靈魂とは何ぞや、生理學によるに靈魂の實在は証明してない、靈魂とか精神とかは頭的作用それ自身に外ならぬ。然らば殉教者が救はれたとは、彼等が一種の偏狂人なるが故に自分免許に救はれたとする丈である、救はれることは抑何事であるか。

斯くの如き宗教を小さい時から教へるのが、どれ丈の益になるであらう。鶏を神様が造つたなど言はずして、小供は小供丈に簡單に進化論を教へる方が善いではないか、それが最穩健な方法ではないか。即宗教を一切やめて、科學丈にしやうとするのである。修身として倫理學を科學的に研究して、これ

は僕に取りて實に無用な質問であつた。斯くの如きは暇人の机上の空論で、須臾く避くべきであつて、吾人は文明生活に甚多忙であつて、斯くの如き怠慢なる質問を心の中に起すが如き者に非ず、と思つた、又吾人は斯くの如き事を心配するまでもなく、吾人の前に持ち來られた澤山の仕事に没頭したならば、此世界の大潮流は吾人を適當の方向と適當の場所に持ち運ぶのである、と思つた、

又色々と煩悶した所でつまらぬ事ではないか、人生など事新らしく考へるから分らなくなる。人生は論ずる迄もなく明に分り切つて居るではないか、それに疑問を挿むと云ふのは瑣細事を根拠とした不平ではないか、又世の中は斯くの如く六ヶ敷いものではない、氣安く渡れば、いくらでも氣安く、簡単に渡れば、いくらでも簡単に渡れるではないか。

今述べた様な考は、よく人から聞くことであり又僕も大いに感じたことであつた。實に試験の問題見たやうに、人生の意義如何、と突きつけられたで所、此の問題は實に無用の問題である、無用なことは考へざるに若かず、然れども衷心の切なる要求なるを

如何せん……………本等に斯くの如き問題に衝突した經驗ある人は、決して無用でないことを徹底して、知つて居るであらうと思ふ。

僕に科學が與へた人生の意義は、無意義と云ふことであつた、意義など大騷をして居る連中は皆偽善者だ、と思つた、人生の目的などもある筈はなかつた。宇宙のあらゆる現象は唯一の自然法(natural laws)の支配下に在つて、超自然法と云ふものは認められない、空間と時間、物質と勢力、自然法、これらを去つて宇宙はないのである、吾人は現在に於て自然法の支配から脱することは出来ない、自然法は反せんとして反すべからず、従はんとして従ふべからず、自然法に對しては反する、従ふの意味は成立たぬものである。生存するが故に生存する也、生くる必要はなきなり、生存するは無意味なり、死するも可なり、然れども死せざるべからざることなし、生死は自由なり。第一に吾人は生れざるに若かざりき、吾人は生れし必要を認めざる也。斯くて吾人生物の生存するは全く無意義也。

科學は遂に僕の生存の必要を認めて呉れなかつた

僕はそれでも仕方なしに生きねばならぬと思つた、更に生存を一層善く導くのは悪いことではない、差支ない事だと思つた。然し乍ら無意味は何處までも無意味であつた、唯自然法の支配の確實なるを知るが故に、これと調和し、その勢に乗ずるは吾人の務であると思つた。

宇宙の萬現象も凡て無意義である、その大勢は一定の方向はない、宇宙は偶然の事を出発点として偶然不定の方向に進むものである、と觀念するより外に仕方がなかつた、その現象の進む順序としては自然法と云ふ確實な法則があるが何れの方向に進むか全然不定であると思つた、宇宙は偶然に斯く靈妙に出来たものである、唯それ丈である、人間も勿論偶然に生れる、卵細胞の受精は偶然である、受精せしめる意志があつても受精せぬことがある、又意志に反して受精することもある、受精卵細胞の生ずる既に偶然なり、此物が個體發生の法則に従つて發育して吾人となる。人間固より偶然の產物である、萬事は凡て偶然の結果であると思つた。

僕が科學に對する信頼も、以上の如くして實に不

安を生じて來たが、別にこれより他に何物もないから僕は唯忍耐して居た、一方宗教に對しては出来る丈拗ねて見た、僕は益癪にさはつた、何となれば世に宗教と云ふ不合理のものがあつて、然もそれによつて慰藉と獎勵とを得て居る實例が少からず有るからである。而して僕は彼等が僕を欺いては居らぬかとまで思つた。僕は一日論文を書かうとした、即論文一つで、宗教との關係を全然斷ち切つて、以後は純粹に科學主義によつて世の中を渡る心算であつたその論文は遂に成らなかつた、而して自分の心の中に在る事の半分をも言ひ表はさないので知つたときに、僕の宗教に對する反感も何處かに間違はあるまいかと思はぬでもなかつたが、強ひて抑へて置いた。而して僕が考へるに此の時が宗教反對の絶頂であつたのではあるまいか、僕はその後宗教に對しては拗ねる外に致すべき方法を有たなかつた。

僕は舊約聖書を讀んだ、僕はバロの如く心を剛愎にされて居るのではあるまいかと思つた、僕はモーセ等がエヂプトを出るとき次の次第を注意した、僕は奇跡は信じ得べきものであると感じた。

× × × × × × × ×
チニコフの人性論を讀んだ時に、『蓋し人生存在の目的は圓滿にして生理的な生命の一周期を完結し、生存の慾望を失つて自然的の本能に歸結し、以て理想的老年を終るに在り』と云ふ所を讀んだときに少からず失望した。僕は人性を解決したならば、従つて人生も解決が出来ると思つて居たのに、此の句を讀んで人性は解決すべきも人生は解決すべからざるものであることを痛切に感ぜずには居られなかつた。僕は科學は駄目だと思つた、『科學の力を信する信念の外また在るべからず』と云ふ言葉が笑談ぢやないかと思はれて仕方がない。ヘッケル一派の人生觀も僕の間はんとすることは黙して少しも語らない、僕の疑問に註釋をつけ、敷衍するの一方であることを感ぜざるを得なかつた。而して昔不合理とした所の宗教が、何の議論も述べず、何の理屈も曲げずして、吾々の疑問を氷解せんとするのを待ち望まれたのである。

科學は駄目だ、生物學、生理學等が僕に示した人生の進路は實に悲慘であつた、科學が吾人に示して

呉れる指針は常に悲しむべき絶望の氣慰に過ぎなかつた、宗教こそ非論理な氣慰だと思つて居たが、今度は科學こそは實に絶望の相を呈して居た。然り科學は絶望の貌相を示して居た。

人間が起す所の因果關係要求は宇宙の凡ての現象を解決し盡す位の元氣があつた時分が、一番愉快であつたかも知れぬ、それから一段下つて、科學は宇宙の現象凡てを解決しなくとも、人生丈は解決が出来る、と思ふときに稍、科學に悲哀の調が現はれた、更に一段下つて科學は人生の全体は解決することは出来ないが、人間の生存に必要な知識は與へて呉れる、生物學上生存程重要なことはないから、科學は吾々に生存に必要な事柄を教へて呉れる、と約束する様になつたときは、科學は一層の哀調を表はして居た、又更に一段下つて科學は僕等に絶望の氣慰を言つて聞かせた、「汝は一個の動物として生れて來た、それで汝は子孫を残さん爲に子さへ生めば、汝の義務は盡きて居る、馬鹿なことを考へたり、煩悶したりする必要はない」、此處に至りて、科學は遂に瀕死の氣息を漏したものである、その悲調、如何

\times
 \times
 \times
 \times
 \times

✕
 ✕
 ✕
 ✕
 ✕

汝等の責任如何。

宗彦の拒象偶像なり
汝等の患者せる

(吉永萌)

春に未だ来らず

一) 事件の巔末

事は本年度龍南會新委員選舉場裡の事に屬す。一部三年兒玉正君は、端艇部委員選舉に移らんとする一刹那、突如として起ち、嘗て鎮遠號所載たりし端艇二隻の現狀を問へり。其該部委員は該部備品中に無しと答ふ。君は更に一步を進めて、其の處分手續、處分仕末に對する辨明を求む。委員答ふるを得ず。蓋し事は現委員事務引受以前に起れるものの如し。氏は進んで該部長を求む。あらず。更に會長に問ふ。會長は取調の上、報告すべきを告ぐ。此の時同じく一部三年本田弘行君は該物件は砂取濱屋に既に賣却せられたりてふ流言を耳にせりと前提してその眞否を問ふ所ありき。

選舉終り會長は再び立ちて、質問の好意を謝する所あり。蓋し事は小事に似たりと雖、二隻の端艇たる名譽ある鎮遠分捕品の海軍省より下附せられたる物にして、龍南會所屬の物件なり。若し端艇部委員にして、何等正當なる手續を履む事なくして恣に之を處分したりとせば、果して如何ぞや。質問者の口吻に徴すれば、忌ましき流言を耳にするを深く憂へ

若し此の流言を事實とせば、否、かゝる流言ある事既に龍南のために慨く可しとして憤る所ありしもの如し。蓋し這般裡の消息は會長も明確に理解して、その眞情に感謝せらるる所なりき。

二月二十五日午后瑞邦館裡、その報告會開かる。席にあるもの會長、端艇部長、由比、江部の諸先生等並びに新舊委員及び一般聴衆なり。會長は起ちて、該端艇は前委員によりて濱屋に賣却せられ、且つその賣却處分に際しては、正當なる手續を履む事なく加之その代價は龍南會會計部に納入なかりし事を明言し、監督の不行届を謝し、質問者に對しては深く感謝の意を表せらる。

更に現委員によりて賣却者及び買受人(濱屋)によりて知り得たる賣却代價、その仕途を報告せり。會員の質問あり。委員、部長の答辯あり。兒玉、本田、長船等の諸君の演説あり。悉く、龍南校風、沈滞を慨し、その刷新を斷行すべしと叫ぶ。言々悲壯、一句一涙の概あり。時に暮暉微かに片雲を照し、龍山の嵐氣既に冷めて窓下に迫る。

(二) 問題の形式的方面

吾人また當時、席末にありて多少の私見を陳じたるもの、而も生れて口舌の業に慣れず、以て所懐を盡す可からず。因て茲に再び略説する所あらん。

問題の形式的方は極めて簡明なり。會員の委員に對する質問（詰問にあらず）委員の是に對する調査によりて意外なる事實が暴露せられたる事は、これのみ一質問者質問を提起せる動機は單に流言を耳にせるに因る。故に詰問に非ず。之を詰問なりと誤解して、其の根據たる流言に非ずやなご反問する如き者は、是れ敵なきに矢を放つ者にして、冷頭一番するを要す。

(二) 調査の結果は如何。

(イ) 該端艇二隻は現龍南所屬物件中になし。
(ロ) 何となれば前委員によりて賣却せられたればなり。

(ハ) 而してその賣却處分たる正當なる手續を履まず故にその處分は不正處分なり。

(ニ) 監督者たる會長及び該部長は此の事實を知らず故に怠慢と云ふ可し。

(三) 責任者は如何

龍南

(甲) ロ及びハによりて前委員なり。
(乙) ニによりて現會長及び現部長なり。
然るに前委員は既に校を去りてなし。現在直接

(四) の責任者は會長及び部長のみ。
その責任は如何にして明にせらるべきか。
是れ責任者自身の問題なり。一步を進むれば會長の問題なり。吾人の與り知る所にあらず。

此の問題が齎らす形式的意味は要するに龍南會備品保管方法の不完全にあり。故に『龍南會受拂規程案』なるもの起草せられ更に審議に附せらるゝ事となれり。吾人たるもの、責任者の深くその責任を自覺して是を明にする誠意と熱心あるを喜ぶ。然れども此の草案の提出それ自身責任者の全責任を十分明にするを得るか。是れ吾人の知る所にあらず。然れ共吾人の私見としては、何等會長及び部長に對し龍南の秩序と統整とを破るが如き形式に於て責任の闡明を求むるを欲せず。

(三) 問題の精神的方面

既に述べたる如く此の問題の齎らす形式的意味は龍南會備品保管の不完全なり、然らば此の問題の齎

ら^る精神^の方面^のの意^味は何^ぞや。吾^の人^は寧^ろ此^の意^味の下^にに於^て此^の問^題を理^解するを欲^す。問^題提^起者^のの眞^意も亦^然ら^ん。

思^ふ、龍^南健^兒の意^氣沮^喪して校^風の沈^衰頹^敗ま^た久^しいかな。時^に慷^慨の士^ありて、校^風刷^新を呼^號す^と雖^も、多^くは一^種の冷^嘲を以^て酬^いられ^き。否^か、^る慷^慨家^も自^稱慷^慨家^に過^ぎざるもの^{あり}。瑞^邦館^裡校^風問^題を論^議せし某^が、そ^の夜[、]南^を指^{して}車^を飛^ばせしな^ど、事^の眞^偽は別^問題^として何^等絶^好のアイロニ^に非^ずや。然^れど校^風問^題が冷^遇せられしは、龍^南人^士の冷^淡々^自ら高^しとする氣^風と^かる問^題を呼^號する動^機と^なるべき具^体的^事件^の生^起せざ^りし事^{なり}。

憲^政擁^護閥^族打^破の聲^は、端^{なく}。大^正劈^頭の政^界を汾^湧せしめ、や^がて政^治問^題は一^轉して、國^民的^運動^となるや、一^波は萬^波を生^み、龍^南の健^兒もまた窈^に、天^の一^方を睥^睨して脾^肉の嘆^に堪^へざるもの^{あり}、而^も時^{なる}かな端^艇問^題なる具^体的^事實^の發^生せ^り。鬱^積せる胸^裡憂^校の情^は眞^摯熱^誠の人^{により}て叫^ばれざるべ^{から}ず。長^船君^が演^說中^校風

刷^新のた^めに自^今粉^骨碎^身せん人^は舉^手すべしと叫^{べる}時^満場^の人[、]期^せすして高^く手^を捧^げたるに^あらずや。

吾^人は茲^に於^てか、此^の端^艇問^題を校^風刷^新運^動の先^驅として理^解せん^とす。吾^人が此^の問^題の齋^らす眞^意味^は過^去に^あらず、將^來なり、形^式的^にあ^らず精神^的なりと叫^ぶもの[、]蓋^し茲^にあり。二^隻のボート賣^却費[、]と^か云^ふ如^き、或^は信^ぜざるもの^もあ^るべしと雖^も、吾^人に於^ては全^然之^を信^ぜん^と欲^す。二^百二^十圓と云^ふも、二^圓二^十錢と云^ふもはた二^十二^錢と云^ふ人^{ある}も無^論之^を信^ぜん。賣^却代^價の如^何の如^きは、此^の問^題の形^式的^意味^に於^ても精^神的^眞味^に於^ても大^差な^ければ^なり。吾^人の切^論する所^は彼^にありて茲^にあ^らず。吾^人は屑^々たる二^十二^圓に拘^泥するを愧^づ、

既^に校^風刷^新運^動の先^驅として理^解せらるべき此^の精^神的^問題^は極^めて神^聖なる問^題なり。此^の神^聖なる問^題を論^ずるに當^り、端^艇部^委員^の質^問者^に與^へたる言^中に曰^く、『若^し黨^派的^感情^のた^め、或^は私^憤を晴^らさんとし、或^は私^利を圖^らんとし、他^人に

煽動せられ、徒に言を正義にかる者ありとせば、何故に更に巧妙なる更に目立たぬ手段をたらすや云々

「と。巧妙に、目たぬ様な手段の模範にやあらむ。ありとせば」と逃路を設けて論せられしと雖も、もし此の言が直接に二名の質問者を指さずとせば、即ち此の場合に何等の關係なき言なりとせば、極めて無用の言なり。論者は無用の言を弄せず、即ち此の言は二名の質問者を指して言及したるもの「なりとして」(敢てその響に倣ふ)聊か論せざるべからず。

敢て問ふ、此の神聖なる問題を論ずるに當り、況んや既に會長も二名の質問者に對しては、懇切に感謝の意を表せられたる後に當り。黨派的感情とは何ぞや。抑も黨派とは具體的に何ぞや。私憤とは何ぞや。誰か誰に抱ける私憤なるぞ。敢て問ふ私利とは何ぞや。誰かの不謹慎も極れりと云ふべし。他人の手段を動せらるるとは何ぞや。更に巧妙なる目立たぬ手段をこれとは何ぞや。二名の質問者の如きは單に眞實なる熱誠男子のみ。例へ如何なる場合に處しても更に巧妙なる目だぬ手段」の如きものに想到し

得る策士にあらず。二人の心境の如きは小智小才、權變自ら喜ぶ如き者の窺知し得べきものならんや。あゝ果して問ふに落ちずして語るに落つか。吾れ是を知らざるなり。

既に述べたる如く此の問題は極めて神聖なる精神的問題なり。從て問題の責任者たる者も精神的に其の責を明にする所あらざる可からず。精神的にその責を明にするとは、何ぞや。眞に職分を自覺するなり。即ち校風刷新のためには、身命を賭するの大勇氣を發露する事なり。(中畧)

少くとも吾人の理解に従へば、此の端艇事件は須らく校風刷新の先驅たる龍南の歴史的事實たらざる可からず。從て之に關する議論、解決報導、須らく公明正大昭々として天日の如く明なるべし。斷じて姑息彌縫を許さず。若しそれ曖昧糊塗の裡に葬り去らんとする如きものあらば、是れ龍南の賊なり。校風の破壊者を辭せず。吾人不肖なりと雖も鼓を鳴らして之を責むるを辭せず。一斬る可しの聲は佛國の輿論を貫徹せしめしと加。蓋し粉糾せる時局の解決には熱

人の期待甚だ大なるを以て、笑つて其の行を送らむ。鵬程萬里、道遠くして、西歐の土、必ずしも、先生の身に佳ならず、今謹んで先生を送るの日、予等は、無言の誠を胸裡に秘めて、先生の爲に、其の健康と祝福とを祈り併せて、吾が雜誌部の爲に御通信の勞を惜まれざる先生の御芳志に満腔の謝意を表せざる可からず。

編輯だより

○今度も發火演習やバラチパス事件で發行がこんなに遅れました。

○諸君の苦心に苦心を重ねられた原稿は今度やこの次ぎあたりの雜誌を飾る様になりましたが、今後もししく御投書の程を希望します。

○何も預言者を真似て言ふのではありませんが、兎角近來龍南に種々な事件が湧いて參る様ですから一つ諸君は鬱憤を叫ばれては如何でしょうか。沈滞して腐敗するのは水計りではありません。校風論でも無い其の外何でも善い、政界にさへ書生論が幅をきかすこの節一つ龍南健兒が虹の様な氣焔を吐いてはごうでしょう。

○あつて三月が來ました軟い風が梅の蕾を吹く頃には又々試験に苦しまられます、この頃の様にチパス話や熱病の話し計り難いである吾々は學校に來るのが何だか不安でしつかりした氣分になれんで誠に困つてゐます。

以下は雜報なるも編輯期日の都合により龍南欄に掲載せり

故惠利武君

舊雜誌部員惠利武君は昨年十月三十一日郷里福岡で亡くなられたそうである。君は明治三十七年に本校を卒業した人で宮野教授とは同期生である。四十一年東京大學政治科を出で大藏省屬から鹿兒島稅務監督局經理部長に昇進して間もなく肺患に罹り俳句など作つて憂悶を遣られて居たそうだが惜しいことをしたものだ。君の文章は雄健で併も珠玉を貫ける如く字も亦頗る奇麗であつた。柔道の初段で豐煩のあの人がかく早世しようとは誰も思はなかつたであらう。實に天命といふものは不可思議なものである。東都なる君の友人から長い長い追悼文が來たけれども頁の都合上省くことにした。希くは諒せられよ。

職員消息

○地質礦物の講師として去九月來任せられたる理學

士池上隆先生は第二乙種ながらも徴されて現に十三聯隊第四中隊に一個の平兵として力められて居るのは同情に堪へぬ。池上先生の代りには中尾清藏先生が一月下旬を以て着任せられた。

○一月廿四日放課後より生徒集會所西洋間に於て教員親睦會催はされ幹事には最古參者最新參者最年長者中老若として杉山、長谷川、松本、小豆澤、白川、坂田の諸先生推薦せられ由比教頭は黒幕として奥生徒監は賄の支配人として之に加はり賄より仕出せる佳肴に十分の興趣を添へつつ六時半頃まで閑話快談せられたと聞く。

○今年の紀元節は諒闇中で例の遙拜式も無いので先生の間には宇土半島の大見村に遠足的の梅見が企てられた。此日生憎前日來の寒風料峭として肌を劈くばかりであつたので集る方が豫期の如く多からず。發起人たる杉山、長谷川、小豆澤先生の外には僅かに由比、長江、牧山、小野の四先生であつたそうである。梅林のあなただけまで行つて、歸られた時は既に秉燭の頃であつた。

○宮野教授の嚴父君は二月二十三日胃病で長逝せら

れた。昨秋桃山御陵參拜の途次福山停車場で御見受け申した温容が偲ばれて謹んで哀悼の微忱を表する。○一月廿二日より二月にかけて江部教授には學事視察の爲め福岡大分鹿兒島宮崎各縣下へ出張せられたが教授の明晰なる秩序ある腦底には定めて種々の印象が浮んだであらう不肖等は其御話を聞かんことを望むや切である。

○教務課雇柿田靖氏は二月四日依願解雇となつた。實は戸畑の明治專門學校書記に躍進せられたのである。

○戸澤教授英國留學に就きては英語科主任空位となるを以て二月六日教授山形元治先生が其後を襲がれた。我等は寡言にして深慮ある山形先生の前途を祝福せざるを得ない。

○杉山教授は二部の學事視察の爲め、小島教授は三部の學事特に獨逸語の情況を視察の爲めに上京を命ぜられ、三月八九日頃より約二週間の豫定を以て御出發の筈、猶沿道の大學及び高等學校にも立寄らる由。